

## Saku no Kusabue by Sato Haruo and his Use of Dialect

Fumio Kusama (Shinshu Junior College)

**Abstract :** At the end of World War II, Sato Haruo moved to Hirane-mura in Kitasaku-gun(now Saku-city) for safety. After a year of village life he edited a book of poems titled Saku no Kusabue with 60 numbers. About one-third of the poems were written using words from the local Saku dialect. This article shows which words were from the local dialect and how they were used.

**Keywords :** Sato Haruo, Saku no Kusabue, World War II, Saku dialect.

## 佐藤春夫「佐久の草笛」における佐久方言

草間 文男(信州短期大学)

## はじめに

佐久言葉は共通語との隔たりが小さいと言われる。おそらくそうであろう。しかし、実際にはきわめて多くの方言とみられる語句があり、佐久地域の中でも土地々々の言葉の違いに驚くことは少なくない。時折、端的に佐久を表すような方言はなんであるのかなどと考えることがあるが、たまたま改めて佐藤春夫の「佐久の草笛」に接する機会があり、この詩集にその答えの一端が有りはしないかと考えた。

「方言」とは一つの地方で行われている言語体系全部を差すものであり(1)、一地方に行われる単語・語法で標準語・共通語と違うものを方言と呼ぶのは狭義の用法であってむしろ俚言というべきかも知れないが、ここでは私たちが日常呼びなれた「方言」という言葉の狭義の用法に従って考えることにする。

昭和二十年にそれまで無縁であった平根村に疎開した詩人にとってはじめて耳にした佐久言葉の幾つかは方言として印象に残ったであろう。そしてそれらがやがて創作の中で生かされたのであり、この詩集には昭和二十年・平根村という限られた時・所ではあるが実際に用いられていた佐久方言が記録されていると考えられる。どのような佐久言葉が詩人の心の琴線に触れたのかを探ってみたい。

## 一 佐藤春夫と佐久

佐藤春夫は第二次世界大戦末期の昭和二十年四月から二十六年十月までおよそ六年半佐久で過ごした。疎開先を佐久としたのは偶然であって、佐久に特別なゆかりがあり、関心を持っていたわけではないという。昭和二十年四月十日付けの弟佐藤夏樹宛の書簡に、「空襲とはどんなものかといふ体験ももう十分に味わたったのだから疎開しようと思つている矢先に信州浅間岳の南麓にある(北佐久郡平根村)という山村に疎開する人があつて、その縁故でそのほうへ参る予定で……」、又、「ただ東京から近いだけに東京との連絡など仕事の上の便利丈は多いと思ひます従つて最上の地ではないまでもまずこの辺が何かにつけて適当と思われるのです。」(2)と記されている。

佐久に移住して一年間に佐久の自然・文化・風俗習慣に触れる中で唄ったものを一卷にまとめたのが「佐久の草笛」(3)である。六十編から成る詩集の中になんらかの形で佐久の方言を用いた作品が十八編ほどある。

## 二 方言の資料に何故「佐久の草笛」か

文学作品の中に方言を取り入れる、或いは方言を用いて作品を書くことは決して珍しいことではない。たとえば私は本学の佐久方言研究会で島崎藤村の「千曲川のスケッチ」に用いられた百年前の佐久方言に触れたことがあるが、この中では人々の会話に現れる佐久言葉は、作家が主体的に方言による表現を試みたというよりも、現象の描写の結果として方言が入っていると云える程度のものである。

それに対して、佐藤春夫の「佐久の草笛」においては、佐久に移り住んで一年もたない時期に、作家が自ら接した地域の人々の使う日常語を駆使して、方言による創作を試みたもので、地域の住民が生きた言葉として使っていた佐久方言を、詩人の鋭い感覚で受け止め、それを自らの言葉として表現している点で極めて得がたいものをもっている。即ち少なくとも昭和二十年にはこれらの言葉はそれまで佐久言葉に無縁であつて、外の世界から入ってきた言葉の専門家である佐藤にとつて、極めて特徴的な言葉として認識されたものである。方言を主題として考える立場で言えば、当時の佐久で実際に用いられていた言葉を記した貴重な資料である。

このことに関して、作者は「佐久の草笛」のはしがきでこの詩集の成り立ちについてふれている。二十年八月の終戦の日を迎えた後も「蓋し浄たる山中を隣み村人の情を喜ぶのあまり、老躯にこの雪国の厳寒をも意とせざるなり」(3)と記し、雑興の多い山居を楽しんでいたのであるが、これらの詩は佐久に移った最初の一年間につくられている。言葉に対する鋭敏な感性を具えた詩人の耳に響く佐久の山村の言葉の中で最も顕著に土地柄を示すものが、作品に取り上げられているといえよう。悠々自適の生活の思ひ出と、この地方の自然美や珍しい風物を伝えるべく、漢詩で言へば竹枝の体に倣い、所々に地方俚俗の言、即ち方言を用いて記した、一種の地誌として認めてもらへば結構といっている。全六十編のちも出す佐久の小さな世界の雰囲気は本来詩において味わいを求められなければならないが、ここでは作者の言葉に便乗して、地誌として、方言の資料として扱ふことにする。

ちなみに、佐藤春夫には佐久の方言を用いた作品が数多くある。幾つかの作品の題名だけ挙げておく。

「佐久の内裏」

「夏山家」

「農婦の死」

「老残」

『のこした』の記 等々。

作家の佐久に対する造詣の深さとその打ち込み振りがうかがえる。

## 三 作品に見る佐久方言

十八編の詩すべてを示して論ずることは紙面の関係もあり不可能なので、全四行の詩をそのまま取り上げるのは数編にとどめ、残りは方言部分のみ抜き出すことにした。各詩篇が全六十編の中でどのような場所に置かれているかを示すため、便宜上番号を付してあるが、原作にはないものであることを断つておく。

なお、※印は原注である。作者は方言について詳しい注を付しており、方言研究の得がたい資料となっている。

### (一) 胡桃

序詩に代へて

胡桃は固く身を守り

錠じょうをおろして住すまいたり

気きころ知れた衆しやうにだけ

おとりもちするつもりづら。

※ おとりもち……もてなしといふべきをかく誤り用いる風あり、衆をしようと言ふこの種のかたこと多き地方なり。づらは同意なればづらの約か。

「づら」については、二〇〇五年二月一八日に方言研究会が行った現地調査の折に、北相木村の旅館、坂上館の女将さん、井出まき子さんから、信州と上州の県境に「そらづら側よりそらだんべ側へようこそ」という碑が建っていると聞きしたが、早速序詩のなかに佐久言葉の代表「……でしよう」を意味する「づら」が顔を出している。後の版では注の「同意なれば」が省かれ、「づらはづらの約か」となっている。

衆は男衆(おとしやう)、女衆(おんなしやう)などと用いられ、現代の佐久の若者

たちもこれを用いている。

衆(しよう)、おとりもち、づらなど、佐久でポピュラーな方言を使用するとともに内容的に佐久人氣質を良く表した序詩である。

(二十八) 樹氷

人の語れるままを

佐久の里夏はうすまく

朝霧の晴れゆくひまを

凍み凍みて一月二月

枝々に樹氷と咲くなり

樹氷(なご)については、島崎藤村の「千曲川のスケッチ」(4)に「其から寒帯の地方と氣

候を同じくするといふ軽井澤付近の落葉松林に俗に『ナゴ』と稱するものが氷の花の

ように附着するさまを想像してみたまへ」と記されている。「なご」は軽井澤と山一つ隔てた平根村でも見られる現象である。二人の優れた詩人がともに興を示しているように厳寒の朝小枝の先まですっぽりと包んだ真っ白の樹氷・霧氷が朝日を受けて輝く様はまさに冬の佐久の美しさを象徴する極めて特異な現象であり、言葉である。

(三十一) 正月十九日朝

村の正月は行事多かるなかに

隣の友はこの朝

おうら火事のめえ婿と

へびやむかでをびりめかし

屋敷のぐるわめくつただ

※ 腰間に大小の木刀を佩び「へび(蛇)も百足もどうけ退け、おうら火事のめえ婿だ、やあり(槍)もかたな(刀)もさして来た胸ばら切られてびりめくな」と唱えてこうせん(五穀の粉)を撒きつつ家の周囲を巡る。若水を汲みし者の役目なりとぞ。

「ぐるわ」は周囲の意であり、「めくつただ」の最後の「だ」は佐久言葉の中で極めて多用

される語尾である。「めくつただ」における「だ」或いは「のです」に当たる表現で現在も盛んに使われている。

また、「こうせん」は麦焦がしの意で用いられる。大麦を炒つてがし、石臼で粉にし、砂糖を混ぜて菓子にしたりそのまま舐めておやつとなった。

作者はこの正月行事には強い興味を示しており、「佐久山村の新年」と題する一文の中でこの行事について改めて記しているのでその一節を引く。(5)

二十日は、二十日正月といひ、又お棚降つしとも呼んで正月棚を取除き物作りの日の刀を帯び、こうせん(米、麦、豆、雑穀を焙つて石臼でひき粉にしたもの)を一升榊に入れなかの粉を屋敷のぐるりに撒きながら歩き廻る間、次のように云つてゐる。

蛇(へび)も百足もどーけどけ

俺(おーら)火事(かじ)の姪婿(めーむ)だ

槍(やーり)も刀も持つてきた

胴腹切られてびりめく(勿)な

毒虫除けの行事である。「火事の姪婿」だの胴腹切られてびりめくなどの文句がなかなか古雅にできている。

昭和二十年には、私も佐久平南端に位置する切原村(現佐久市中小田切)でこの行事を行っていた。年男が毎年居る訳でもないので何年かにわたつて、素朴な節回しで伝えられた節をつけてこの唄を唄いながら前の家と我が家の周りを巡るのが私の役目であった。その記憶によると、詩人の記す詞とは一部份の言葉で唄っていた。就中、作者がなかなか古雅だと評価する「火事の姪婿」の部分については大きく異なっていた。火事の姪婿はいかにも奇想天外な言葉の結びつきの面白さがあるが、これはいささか飛躍がありすぎると考へる。私の唄ったのは「鍛冶のめえも」であった。「かじ」は子供心にその意味に迷いが生じ、祖母、母親などに確かめて「鍛冶屋」であるとの答えを得て、納得して唄ったことを思い出す。武力の象徴が槍や刀でありそれを造る鍛冶屋の威力その威を借りて姪婿の若者が毒虫を成敗する図式であらう。

しかしこれはどちらが正しいかといった問題ではない。諺にも、所変われば品変わるという。どこかに元唄があつてそれが伝播する過程でバリエーションが生じたり解釈が違つたりすることは獅子舞の唄などにもよくみられることである。

また、我が村では、三・四行目は「槍も刀も差してきた／胴中切られてびりつくな」とした。

腰の大小は、「ぬるで」の枝を切り、刀身の部分は皮を剥いてこしらえたが、木の肌が際立つて白かった。

(二十八) 類白の歌

山の寒さに里に出  
うぐひすの歌知らぬ身は  
すことすとこととさげすまれ  
はたれ  
残雪の畑になくだんか

※ 方言「すとことと」は類白のこと、「だんか」は「にあらずや」の意

③「そうだ」とい、「やれ」などを用い、この時代にはとくに女性言葉として用いられていた。これは「そうですすよねえ」ほどの意味であろう。「だんか」もよく用いられた佐久言葉の一つである。

(四十八) 春のおとづれ

挨拶のさまじさ  
おおりののちかか  
大降の後三日四日

い  
異なお天気ぞこわしたが

かげどけしやす今日あたり

春ぞこわすぞこれからは

※ 「大降りぞこわす」「異なお天気ぞこわす」「日かげどけしやす」などは日常の挨拶なり

佐久の挨拶言葉のオンパレードである。大雨、大雪には「大降りぞこわす」「ぐずついた天気や雨雪の兆しに対しては「異なお天気ぞやす」と言い交わす。望まれた雨に対しては「いいお湿りでやす」という。春先、気温も上がって春の陽気が満ち始める頃、日影の硬く凍てついた氷雪さえ解け出す頃、「今日当たりは日かげの雪も解けやすよ」と春の訪れを歓迎する。「春ぞこわすぞこれからは」と佐久人の春を迎える高揚した感情がおおらかに唄われている。

「こわす」「やす」は村人慣用の語尾なりと、作品三十五番の「ひとことならすおもひやす」の注で述べられている。男、女ともに用い発音は丁寧な「ゴフス」と云うこともあるが、

口の開きを小さくした穏やかな「ゴフス」に近い場合もある。

作者はこの言葉に親しみを感じていたのか、昭和二十八年に東京から平根村の柳澤武久氏あての手紙に「おめでたうこわす（中略）（東京は本日もとくに寒うこわすぞ」と書いている。(6)

また、「今日あたり」の「あたり」は後の版では「いつは」に改められているという。「あしたいつは帰つて来やしように」などと用いて「あたり」よりも佐久方言らしい語となる。

(五十五) 公会堂

わが寓に隣す。折りも村の鎮守の祭近づきて  
わかうと  
若人らおどれるらしも

春の窓あかりうるほひ

小夜ふけを歌声すなり

起き出でてわがまりおれば

※ まるは、便を排出する意の古語なるを、この地には今も常用語として生きてきたり

詩人のことばどおり、「まる」などは、現在も佐久地方では立派に通用する表現であるが、古語としてはギリシャ神話の中の神々の争いや意地の張り合いを髣髴とさせる。相並ぶ神々の争い説話として、播磨國風土記の中で大汝命と小比古尼命がそれぞれ「屎下らずして行かむ」「聖粘土の荷を持ちて行かむ」と我慢くらべをする話を思いださせる。(7)

四 その他の方言使用例

これらのほか、九カ所に方言が使用されており、さらには、古代、交代で都に上り、木工(もく)寮で労務に服した木工、番匠(ばんしよう)、ばんしよう(がなまつてきた「ぼつちよう」を、脚韻を踏んで童謡風にあしらった作品「童謡」などがあるが、多くが単語のレベルの使用例である。表一としてまとめておく。

おわりに

佐久方言の織り交ぜられた詩集を読み終えて、これらの詩に対してまさに我が家に

帰ったような安らぎと親しみを覚える。佐藤春夫は疎開したばかりの頃は変人扱いをされたが、その人柄が知られるにつれて村人たちから親しみを持って遇されるようになったという。自分たちの文化である言葉に近づき、それを理解し、好んで用いようとする外来の文化人に、地元の人たちが親愛の情を示したのは自然のながれであろう。方言によって守られ、伝えられる文化、風俗は次第に消滅しつつあるとはいえ、残されたものも少なくはない。

ひっそりと、いわば社会のひだの中に残っているような方言を、その方言を知らない

表一 単語レベルの使用例

	方言	作者注	備考
二	ぼや	粗朶の意なり	伐り取った細い木又は木の枝、粗朶には焚き木用と農・工・土木材料用の二用途があり、ここでは焚き木の意。
十三	ぼちやられ	打ち捨てられるの方言なり	佐久ではぶちやられるが一般的。県下ではびちやる、べちやる等がある。
十六	はり	アカシアの木を村人かく呼ぶ	ニセアカシアの別名リエンジュ(針槐)の略称であらう。
十八	八日霜	彼岸の後八日目には初霜降るとこの地では初霜をかく呼ぶ	
二十五	そべりそ	そべりは寝そべるの意にてこの地方では方言として日常使用される	そべるはからだを横たえ足をのぼして休むこと(8)。
三十七	ことろの雪	ことろは岩石の峻険なることろを云ふ方言	ことろについては不明。
三十九	からんちよ	一種の山繭鳴り	
四十五	雪わり	さやえんどうの類にて最も早き野菜なるをもつてかく呼ぶなるべし	雪わり豆は広辞苑によるとそらめとありさやえんどうとは別物である雪割りは現在も用いられる美しいことばである。
五十四	たて	山の崖下山ぶところなどの地勢を呼ぶ方言	現在も「たての畑」などと用いられている。アクセントは「て」に置かれる。

人たちに共通語に翻訳して理解してもらうことは大変困難なことである。「佐久の草笛」の作者のように自らそれに近づいて、理解し、その言葉の使用を励ますことが望まれる。

佐久を一言で示すような方言などと書いたが、その答えを見出すことはどうい無理なことである。この詩集に記された一つ一つの語に捨てがたい味わいがあり、いずれの語にもその資格があるうと思われる。

今何故方言かと自分に問うことがある。佐久の地域社会に融合し、連携して地域の発展にも貢献したいとする信州短期大学にとって、佐藤春夫の姿勢は不埒に富むものがあると考ええる。また、将来福祉介護の分野での仕事に携わろうとしている学生たちにとっては、高齢の人々が口にする方言に「められた本音に耳を傾けることができれば、弱い立場のクライアントとの間に強力な心のチャンネルを築くことにもなるであろう。

勿論方言について調べたり語り合うのは、それぞれの言葉の意味や、その言葉にまつわる深く広い奥行きと幅を持った背景に触れることに大きな楽しみを見出すからにはかならない。

(投稿 二〇〇六年十月三十一日、受理 二〇〇七年一月十一日)

〔注〕

- (1) 平山輝男『日本の方言』(講談社現代新書・一九六八年)。
- (2) 『定本 佐藤春夫全集 第36巻』(臨川書店・二〇〇一年)。
- (3) 『定本 佐藤春夫全集 第1巻』(臨川書店・一九九九年)。
- (4) 島崎藤村『千曲川のスケッチ』藤村全集第5巻『筑摩書房・一九九五年)。
- (5) 『定本 佐藤春夫全集 第25巻』(臨川書店・二〇〇〇年)。
- (6) 『定本 佐藤春夫全集 別巻第1巻』(臨川書店・二〇〇一年)。
- (7) 直木孝次郎他編『鑑賞 日本古典文学 古事記・風土記』(角川書店・一九七八年)。
- (8) 長野県南佐久郡誌編纂委員会編『南佐久郡誌 方言編』(長野県南佐久郡誌刊行会・一九九六年)。